

廬山寺 紫式部邸跡

廬山寺(ろざんじ)の章

天台系圓淨宗の大本山。本尊は阿弥陀如来。
正しくは廬山天台講寺(ろざんてんだいこうじ)。

天慶年間(938)比叡山第18世座主の慈恵大師が京都の北、船岡山南麓に開いた與願金剛院に始まる。寛元3年(1245)法然上人の弟子の住心房覚瑜上人が出雲路に廬山寺を開き、南北朝時代(1368)にこの二カ寺を兼務した明導照源上人によって統合され、この時から廬山天台講寺と号した。



その後、応仁の兵火に遭い、また織田信長の比叡山焼き討ちにも遭遇するが、正親町天皇の勅命を受け、天正元年(1573)現在地に移転する。

現在の堂宇は寛政6年(1794)に光格天皇が仙洞御所の一部を移築し、女院、閑院宮家の御下賜でもって改装されたものである。明治維新までは御黒戸四箇院(宮中の仏事を司る寺院)の一つで、現存する唯一の撰家門跡である。

当山の節分会は通称「鬼おどり」といわれ、京都の冬の代表的行事である。

開祖良源上人が宮中において三百日の護摩供を修せられていた時に現れた三匹の鬼(人間の三種の煩惱、即ち貪欲、瞋恚(しんい)、愚痴の三毒)を追い払い、開運をはかり、新しい節を迎えるという法会行事である。

また当地は、昭和40年(1965)に考古学者角田文衛博士によって、「源氏物語」の作者、紫式部の邸宅址とされた。式部は鴨川の堤防の西に接して営まれたこの「旧い家」で、一生の大部分を過ごしたといわれ、この邸宅で藤原宣孝との結婚生活を送り、一人娘の賢子(かたこ)を育て、源氏物語を執筆したのである。

紫式部の章

紫式部の生涯 紫式部は藤原撰関家の傍系に属する家柄に生まれた。彼女の父親の藤原為時は役人としては越前守などの受領(国事)程度だったが、歌人や詩人として知られた人で、式部は幼少の頃からこの父親の影響を受けたといわれる。

式部は鴨川に接した家で幼少期を送るが、通りを挟んだ筋向かいの土御門殿には、再従姉妹の藤原倫子(ともこ)が居り、後に藤原道長の正妻となる倫子は、式部の人生に大きな係わりを持ったと思われる。

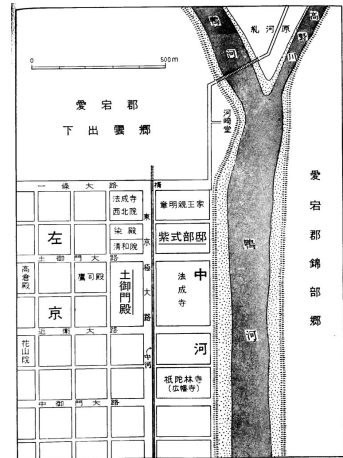
式部が24歳の時、父親の為時の越前守任官に随って越前国府(現在の武生)に赴くことになる。雪深い北国で、彼女は専ら読書や物語の構想の日々を送っており、ここで光源氏を主人公にした短編小説を幾つか書いていたらしい。

式部は一年半ほどで雪国での生活を切り上げ、家族と別れ一人都に帰り、兼ねてから縁談のあった藤原宣孝と結婚する。式部が26歳、夫の宣孝は20歳ほど年上で、しかも正妻もあり大きな息子が居たというから、夫との間に一人娘の賢子を出産するが、式部にとって結婚はそれほど重要なことではなかった。それよりも一人鴨川沿いの「旧い家」に住んで「源氏物語」という世界的な大ロマンの執筆に没頭していたのである。

式部に転機が訪れるのは、一条天皇の中宮、彰子の女房として出仕することになったことである。彼女が33歳の頃で、その頃宮廷で「源氏物語」の作者で、

才媛として聞こえた式部は、彰子に歌や文学を教授したのであろう。彼女の宮廷生活は7年ほど続くが、この間彼女が仕えた彰子は、後に後一条天皇となる敦成親王を生産し、父親の藤原道長は摂政関白への道を登りつめようとしていた。

源氏物語がいつ頃完成したのかは定かではないが、宇治十帖（光源氏の死後の物語）を除く、光源氏の物語は宮廷生活に入るまでに書き上げられ、全てが完結するのは式部が37歳ごろのことといわれる。式部は40歳ごろまで宮廷での女房生活を送った後、寺町の「旧い家」で没した。式部の没年は多説あり44歳から47歳頃と思われるが、それは3月3日になっても桃の花の咲かない年であった。



第3図 平安京における紫式部邸の位置（この場所は推定位置）

源氏物語余話 さて、後に書かれた「更級日記」に源氏物語のことが出てくる。『(源氏物語の)紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼえゆれど、……「この源氏の物語、一の巻よりしれみなみせたまへ」と心のうちにいのる。』

更科日記は、菅原孝標の娘が13歳の頃から52歳までの人生を回想した日記文学で、これは彼女が14歳の時、源氏物語の巻を読んで夢中になり、何とか全巻を読んで見たいと心のうちに祈った、というもの。幸い彼女の家は5世の祖に菅原道真があるという文人の家で、その望みはまもなく叶えられることになる。

或る日、彼女がおばさんなる人の家を訪問した時、そのおばさんが、「そうそう源氏物語を捜してると言ってたわね。私の所にあるから持って行きなさい」と言って、その全巻を木箱に入れてくれたのである。さっそく彼女は夢中になって源氏物語を読み、この幸福感の前には、後の位も何になろうと日記に書いている。

この女性が、源氏物語を夢中になって読んだのは彼女の青春の頃で14歳の時、それは1021年（治安元年）で、紫式部が全巻を書きあげたのが1009年として、12年後のこと、源氏物語は54巻という大作だが、おそらくその頃はすでに沢山の写本が作られ、貴族の文学子女を夢中にさせ、武家の姫たちを夢中にさせ、江戸や大坂の町娘を夢中にさせ、与謝野晶子や平塚雷鳥を夢中にさせ、瀬戸内寂聴先生を夢中にさせ、千年もの間、女性達を夢中にさせてきたのである。

さて、更科日記の作者が書いた「紫のゆかり」だが、それは「紫の上」に関わるお話ということ。

源氏物語は誰でも知っているように、主人公は光源氏一人ですが、女性は大勢出てくる。彼女達は色々な姿で生き、悩み、苦しみ、あこがれる。「紫の上」は彼女たちを代表する女性で、この物語が別名「紫の物語」と呼ばれたり、さらに作者が紫式部と呼ばれたのも、紫の上からきているのである。

式部が描いた彼女の存在が、時代を超えて女性たちの心を捉え、「源氏物語」を永遠の文芸作品にしたといえるのでしょうか。



私家版源氏物語論 この何行かで「源氏物語」を書こうとしている訳だが、さらに僕は源氏物語を読んだこともなく、今回ざっとあらすじを読んだだけだが、「源氏物語」がなぜ千年もの間、読まれ続けたか分かりましたね。それは、「光源氏は自分に似ているところがあるなあ」と思わせてしまうところが、優れた小説なんです。女性の場合は登場人物が多いので、いろいろいえるのですが、瀬戸内寂聴先生によると、それが「紫の上」というわけです。

紫の上が最初に登場するのは、五巻の「若紫」だが、それまでに「桐壺」、「帚木」、「空蝉」、「夕顔」と巻が続いて、これらの巻で源氏の主要なテーマが提示されているといってもいいでしょう。「源氏のテーマ」、それは「母のイメージ」です。要するに、光源氏はマザーコンプレックスの塊なんです。

源氏の母は「桐壺更衣」という絶世の美女で、時の天皇に愛され、一人の男子を出生する。その男子が光源氏。ところが天皇の愛を一身に受けた桐壺は他の女性の妬みや恨みから心労で死んでしまう。

やがて少年となった源氏は母とそっくりの義母の藤壺を慕うようになる。ところが、藤壺は天皇の後、二人は一度だけ交渉を持ってしまいが、それを最後に藤壺は決して源氏を受け入れない。この時源氏は17歳、源氏は母への満たされぬ愛に苦しみ、他の女性を求め、空蝉、夕顔と話は続いて、いっばしのプレイボーイに成長した頃、まだ10歳の少女だった若紫（のちの紫上）と出会い、若紫に藤壺の面影を見た源氏は無理やり妻にしてしまう。こうして紫上は源氏の本妻になって（この頃は二夫多妻で他に正妻や后が何人もいる訳だが）、子供が産めなかったため他の后の子供を育てたりして、悩み、恨み、嫉妬し、生涯を源氏に尽くすことになるわけです。そして紫上が死んだ後、寂しく源氏も死んで、物語は終焉を迎えます。

お分かりだろうか。源氏の時代は男性社会で、しかも高貴な身分の源氏だから「源氏物語」の主人公たりえた訳だが、彼が本当に愛した女性は生涯で三人しか居ない。

それは母と、母のイメージを映す年上の女性と、妻。貴方や私と同じように何処にでも居る男じゃないですか。

（資料） 「紫式部のイメージ」朝日選書、吉井勇訳「源氏物語」